

特別講演

主催 埼玉医科大学産科婦人科学教室 ・ 後援 埼玉医科大学卒後教育委員会

平成17年3月4日 於 埼玉医科大学第三講堂

がん緩和医療の現状 がん告知とその後の治療 ―緩和医療に何が出来るか―

余宮 きのみ

(埼玉県立がんセンター緩和ケア科)

緩和ケアに対しては、一般的に「死の医療」といった先入観を持つことが多いようであるが、実際には、患者が苦痛を訴えた時から始まる、身体的、社会的、霊的、すなわち全人的な苦痛に対するケア全体を指していると言える。この範疇には患者のみならず、その家族をも含めて考えてゆくべきであると考えられている。緩和医療の目標は、患者とその家族にとって最良の生活の質(QOL)を目指すことである。そのためには、①全人的なケア、②チームとしてのアプローチ、③家族のサポート、④コミュニケーション、⑤ケアの継続の5つの要素が不可欠である。病気の進行に伴って日常生活の活動性(ADL)は次第に低下してゆくことになるが、このようなアプローチが成功すると、次第に患者のQOLが上昇することが実際に起こりうる。これは、十分な緩和ケアによって身体的苦痛が取り除かれ、さらに様々な周囲からのサポートを受けることによって、本当の自分、自分が何を必要としているのか、といったことが理解できるようになり、自分の存在をはっきりと認識し、家族や社会の中における「自分」の位置づけが可能になるからであろう。患者さんがこのようなプロセスを経験できるためにも、緩

和ケアに携わる医療者は、まずは患者さんの苦痛を取り除く技術や知識を十分に持たなければならない。これは緩和医療者にとって最低限必要なことである。しかしながら、さらに必要なことは、患者さんを主体とした患者さんの見方、言い換えればいかにその患者さんを理解しようとし、実際に理解できるかという一点にかかっていると言える。患者さんを少しでも理解できたときに、患者さんと医療者の間には初めて信頼関係が生まれ、患者さんとの全人的な関わりが可能となる。実際に、埼玉県立がんセンターの緩和ケア病棟には様々な患者さんが入院して来られる。入院された段階では肉体的苦痛が大きく、QOLの改善等が期待できない様に思われた患者さんであっても、十分な身体的ケアによって肉体的苦痛が取り除かれ、患者さんとのコミュニケーションが徐々に可能となり、さらに医療者が患者さんを理解しようと努めてゆくと、最終的には患者さんには笑顔が生まれ、生きてきたことを感謝される様にまでなってくられる。緩和ケアの理想的な姿であり、是非追求してゆきたい世界である。

(文責 藤村正樹)